



京大広報

号外

2003. 4

目次

卒業式・学位授与式

- 卒業式における総長のことば.....1434
- 修士学位授与式における総長のことば.....1436
- 博士学位授与式における総長のことば.....1438

大学の動き

- 平成14年度卒業式.....1439
- 平成14年度修士学位授与式.....1439
- 博士学位授与式.....1440

医療技術短期大学の動き

- 平成14年度医療技術短期大学部
卒業式・修了式.....1440



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成15年3月25日

総長 長尾 真

今日、京都大学を卒業される2,746名の皆さん、まことにおめでとうございます。元総長沢田先生、ならびに名誉教授の先生方のご列席のもとに、副学長、各学部長とともに皆さんの門出をお祝いできることは、私の最も喜びとするところであります。この卒業式にご参列下さいました皆さんのご両親、ご家族、関係者の方々にも、心からお慶び申し上げます。

皆さんが小学校以来、長く勉学を続け、最高の学府である京都大学を卒業する日を迎えることができましたのは、皆さん自身の努力はもちろんのこと、背後にあって有形無形の支援をして下さった皆さんのご両親、あるいは親族その他の方々の御陰であり、卒業にあたってこれら皆さんの恩人に対して感謝しなければなりません。

皆さんは京都大学の学生生活を通じて何を学んだのでしょうか。卒業式に際して皆さんそれぞれによく考えていただきたいと存じます。それぞれの学部学科の専門的基礎知識を身につけて社会に出てゆく人、また大学院に進学してさらに専門分野の勉強をしようとしている人など、いろいろとあるでしょう。いずれの場合も、学問は今日急速に進展しており、大学で学んだ先端的なことは数年もたてば役にたたなくなるでしょうから、これからも常に勉強を続けねばなりません。

(1) 大学で学んだこと

社会で重要な立場に立たれた方々の中には、しばしば「大学では遊んでばかりいてるくに勉強しなかった」とか、「大学の講義は卒業してからあまり役に立たなかった」とかおっしゃる方が多くおられます。青春の時代にはよく学びよく遊ぶのは当然のことであり、楽しい遊びの方の記憶だけがいつまでも残った結果、そういう発言となったのでしょう。しかし、そういう人に限って実際は大学時代によく勉強されたに違いないのであります。なぜならば、もしそういった人達が青春時代を大学で過さなかったとしたならば、その人の今日はおそらく無かったに違いないのであります。本人が自覚するしないにかかわらず、大学の学生生活はその人の人生にとって



大きな力となっていることは間違いありません。大学で学んだ基本的なこと、いわゆる教養というものは身につけていて、いつまでも忘れないものであります。

さらに学生生活においては、大学で直接学んだこと以外に、目に見えない形で物の考え方、物事に対する価値観、人生に対するあるべき態度などを学び取り、体得します。これがいわゆる教養の核となる最も重要な部分であります。教養とは何かについてはいろんな考え方がありますが、その一つに「学んだ知識を全て捨て去った後になお残るもの、これが教養である」ということがよく言われます。ここでいう教養の核となる部分であります。遊んでばかりいてるくに勉強しなかったと言う人も、この意味での教養にあたるものは、学生生活を通してしっかりと獲得しておられたのではないのでしょうか。そうでなければ、千変万化の厳しい社会を生き抜いて、その人の今日があるということにはならないはずであります。別の言い方をしますと、いろんな具体的な知識はその時その時に獲得すれば何とかなるが、この教養というもののしっかりした獲得が長い人生においていかに重要であるか、特にそれを学生時代にしっかりと身につけることがいかに大切であるかということを、「大学では遊んでばかりいた」という人の話が意味しているとも言えるでしょう。

この教養の中でも最も根本的なもの、すなわち自分の人生観というものが確立される青春時代を京都大学において過したということは、皆さんにとってかけがえのない貴重なことであります。京都大学ほど物事を根本的に考えさせる環境を与えてくれる大

学は他にないからであります。京都という都市、京都大学の持つ学問と真理に対する真摯な態度などから育まれた、皆さんそれぞれの人格・精神こそが、これからの長い皆さんの人生を根底から支えていってくれるのであります。皆さんはそのような無二の価値を持つ京都大学の卒業生として社会に出てゆくのであります。どうか自信と誇りを持って活躍していただきたく存じます。そしてこれからも時折は京都大学の学生時代を思い出し、自分の人格をより良く深め、またそれに磨きをかけていって欲しいのであります。

(2) 責任と使命

さて皆さんは大学を卒業し社会へ出て、いよいよ本当の意味で一人前となるわけではありますが、そこで最も大切なことは自分のことは全て自分が責任を取るといこと、すなわち自己責任という意識をしっかりと持つことでもあります。人に指示されたからしたというのではなく、たとえ指示されたことであっても、それを自分がしたといことは自分の判断でそれを決定したといことであることを認識しなければなりません。何事につけても、つい他人に責任を転嫁しがちな今日ではありますが、この責任感こそが社会生活をしてゆく上で最も大切なことなのであります。

さらに、これからの社会に対する使命感も持っていただきたいのであります。社会に対して自分なりに貢献するといことでもあります。自分の存在は自分の力だけによっているのではなく、多くの他の人に依存し、支えられて存在しているといことを知らねばなりません。親・兄弟だけでなく、先生、友人、さらには自分の全く知らない人、関係のない人にまで御蔭をこうむっているのであります。今日の物の考え方はしばしば自己中心的であり、自分の権利の主張といことになりがちですが、それでは社会は成り立ちません。世の中には一人勝ちといことはありえないのであり、共存共栄への努力が大切であります。そのためには謙譲の精神を持ち、他に対する協力、社会に対する貢献とい視点を持つ必要があります。自分の心が豊かになるためには周囲の人々もまた心豊かでなければなりません。これは人と人との関係、企業と企業との間だけでなく、国と国との関係についても言えることでもあります。

(3) 独自性と忍耐

次に大切なことは他人の真似をしないといことです。多くの人が時代の流行に乗って同じようなことをしていたり、長い目で見たら実にくだらない競争をしているといことが世の中には多くあります。また現代は改革と革新の時代と叫ばれていますが、あまりにも急激な変革は多くの歪を生じ、何年か先には大きな矛盾となって現れるといことも多いのであります。ただそういったことの無意味性を理解したとしても、自分だけが多くの人のしていることをせず、自分の信じる道をコツコツと進むといことは大変困難なことでもあります。特に評価ばやりの今日、他人からの評価によって価値が決められてしまうとい状況下では、これには忍耐力とい非常な勇気が必要であります。しかし深く考えた末に得られる信念に基づいた、そういった勇気を持たねば、本当に良いこと、意味のあること、社会に役立つこと、あるいは新しい独創的なこと、といったことはできないでしょう。

自制心と忍耐力をしっかりと持ち、自分の信じる道を追求すること、少なくとも自分の信じない事には与しないこと、といったことも大切であります。ただこれを偏狭で頑固な考え方でやれば唯我独尊に陥る危険性があります。京都大学の自己点検・評価の作業において卒業生にアンケートをしましたところ、京都大学の学生は国際性・協調性にやや欠けるところがあるとい結果が出ています。そうならないためには、他人や世界をよく知り、おおらかな心、寛容と自信、そして客観的な物の見方をし、自分の位置づけを知るといったことへの努力が必要であります。自分の理想とする人生の生き方にできるだけ沿った人生を生きるといことは、現代においてはほとんど不可能なことではありますが、そういった考えを持ちながら最善の努力をするといことは大切なことでもあります。

(4) 社会への貢献

以上に述べたことは古い考え方であるとい人もいるでしょうが、正しいことは古くから今日まで、いつの時代にも正しいのであります。こういったことは大学の授業で直接的には習わなかったでしょう。しかし、1200年の伝統を持つ京都に生活し、

京都大学で学問を学ぶことによって、皆さんは間接的に、また暗黙のうちに体得したのではないのでしょうか。そうであることを私は皆さんに期待をしたいのであります。あるいは少なくとも京都大学で学んだことの最も大切な真の価値はそういうところにあったのだということを皆さんがこれからの人生のいつかの時点で自覚していただくことを期待いたします。

これからの社会、また世界はいろんな意味で困難山積の時代であります。民族や国家間の対立・抗争が激化しつつあり、難民は増大し、貧富の格差がますます激しくなっております。また人口爆発とエネ

ルギー・食糧・水などの不足が深刻化しつつありますし、大気や水・土壌などの汚染を典型とする地球環境問題など、数え上げればきりがありません。こういったことの解決は容易ではありませんが、これからの社会を支える皆さんが、国際的な相互理解、相互協力の努力を通じてこういった難問の解決にあたることが期待されています。長い忍耐のいる仕事ではありますが、皆さんは京都大学で培った力によって少しでもよい社会、明るい世界が作り出せるよう、それぞれに努力していただきたく存じます。皆さんの新しい出発を祝福して私の饒の言葉といたします。

修士学位授与式における 総長のことば

平成15年3月24日

総長 長尾 真

ただ今修士の学位を得て京都大学を出てゆかれる2,038名の皆さん、おめでとうございませう。ご列席の名誉教授の諸先生、副学長、各研究科長、その他教職員の方々とともに、皆さんの修士課程修了を心からお慶びいたします。

さて皆さんの修士課程二年間の学生生活はどのようなものだったのでしょうか。学部学生としての勉強の仕方と比べてどのような違いがあったのでしょうか。修士課程では皆さんは自分の研究テーマをはっきりと持ち、主体性を持った研究を行い、これを本格的な研究論文に仕上げたに違いありません。そこに学部における卒業論文の研究とは随分違うところがあったとあってよいでしょう。そして研究とはどのような事であるかについての理解も深まったに違いありません。また当然のことながら、自分の研究テーマに関係した研究が世界のどこでどのように行われていて、自分の得た成果がその中でどのように位置づけられるかということがはっきりと見えているに違いありません。

研究テーマと研究の仕方を決めて研究を進めてゆくとき、皆さんには試行錯誤や迷いがあったでしょう。自分の期待する結果や結論に至る道だけを直線的に突き進んでゆくというのは、確かに効率のよい

方法ではありますが、あまり感心しません。迷いによって物事を深く考えることになりませうし、また研究の途中で何か大切なことを見失っていないかどうかという反省、さらにはゆったりとあちこちを眺め、廻り道をしながら進んで行くという余裕、研究における遊びの心、なんでもない事のようにもなぜそうなのかという疑問を持つこと、といった好奇心・探究心を大切にしなければなりません。

昨年ノーベル化学賞をもらった田中耕一さんの研究はまさにそういった研究者の真面目な疑問と探究心から得られたものなのであります。英語ではserendipityと言われていることではありますが、そのような幸運に恵まれるかどうかは研究者の常日頃の探究心によるわけでありませう。このようなことでなくても、研究の途中で得られる副産物、by-productと呼ばれるものが高く評価される場合がしばしばあります。自分にとっての目標からすればそれほど大した事ではないと思う事が、思わぬ形で製品につながって広がっていったり、副産物的な研究成果が他の人の研究にいろいろと役立ったりする場合があります。したがって研究というのは試行錯誤で廻り道をしながら、また楽しみながら進めてゆくことも必要なのであります。このような経験は、これから皆さんがどのような道を歩まれようとも役に立ち、大きな力になるでしょう。

皆さんは修士課程の研究を通じて自分で解決すべき課題を発見する能力も持ったはずであります。世の中には分からないこと、解決すべきことが山積し

ていますが、これをどのような形で捉え、どのように課題設定すれば問題の本質が明らかになるか、そしてその問題を解決する道が発見できそうであるかということを考える力が養われたのであります。また同じような課題に誰か他の人が直面していないか、どのようにしてその課題が解決されたか、またされようとしているかといったことの調査能力も獲得したでしょう。この能力も大切であります。世界中あちこちで類似の課題が持ち上がり、検討されていて、ひょっとするともう解決されてしまっているかもしれないからであります。今日この調査は各種のデータベースを検索することでほとんどの場合十分であります。その課題に関係する機関を訪問し、直接その問題を扱っている人に会い、意見交換をすることを通じて、どのような考え方でどのように具体的な課題解決の努力をしているかを知ることが大切です。自分の気づかなかった考え方や課題といったことに気がつくことが多く、また将来やるべき事について大変参考になるからであります。

このような、皆さんの研究過程における様々のことは、皆さんが社会に出て行って実務の部門を担当する場合にも類似の形で出てくるのであります。その際、もっとも大きな違いは、解決に至る道が学問研究の場合よりもはるかに多岐にわたり、種々の条件や環境についての考え方が異なれば全く正反対の結論が得られることさえありうることであります。したがって、このような複雑な問題については、関係する人達と徹底的に議論をし、あらゆる可能性について吟味することが必要であります。このようなプロセスを踏むことによって、自分の全く気づかなかった考え方や事実が明らかになり、問題解決の道もはっきりするでしょう。そして相互理解が深まり、得られた結論を実行する際に皆の一致した大きな力が得られ、スムーズに成功に導けることにもなるわけであります。

皆さんは社会に出て何年かすれば企業の課長や部長といった組織の長となったり、研究グループのリーダーとして活躍することになるでしょう。その時には自分が率いている組織の全てのことについて責任を負うことになるわけで、その覚悟をしなければなりません。現代の問題の一つは、この責任ということについての意識があいまいになり、リーダーとしての意志がはっきりせず、またグループ全体に

明確に伝わらず、ややもするとグループの一体性が欠けるということであります。ではどうすればよいかという時に、組織の内部の人達に対してむやみに詳細にわたって命令したり、強制したりするというのは決してよい方法ではありません。全体がうまくゆくためには、一定の方向へ向けての意識が全員に染み渡ることが大切ですが、全員がそれぞれの能力を十分に発揮できる余裕のある雰囲気を作り出すことの方がはるかに重要であります。そしてお互いに対等の立場で議論することが必要であります。仕事の遣り甲斐があって、努力すれば評価され感謝されるといった生き甲斐を感じさせる場を作ることあります。

こういった場合は功利的な考え方から作り出せるものではなく、全ての人を自分と対等の人として、その人の考え方、立場を尊重し、その人の誠意に敬意を払いながらお互いに協力して目的に向かって努力するということから自然に出てくるものなのであります。これは決して難しいことではなく、研究の世界では当然のことであり、人を人として尊敬し、正しいこと、より良いことを求めて努力する共通の仲間として対応するという実に単純な基本的なことを実行することに尽きるのであります。これは職場においても、社会においても、また国と国との関係においても通じるべきことであると存じます。

現代という厳しい競争社会において、他に負けない成果をあげるためには一致団結して頑張りねばなりません。それによって人々の健康が破壊されたり過度の労働が原因となって悲劇が起こるようでは、何のための労働であるかということになってしまいます。人々の持つべきゆとりと仕事の両立・バランスということは困難な課題ではありますが、その解決には社会全体に他人の立場を尊重するという基本的な考え方を浸透させてゆくことが必要であります。皆さんはこれから社会に出て、それぞれの分野の専門家として仕事をしてゆくこととなりますが、こういった人間同士の相互関係や生活の面にも目を向けられる成熟した人間となっていただきたく存じます。

皆さんの将来の大成を期待し、お祝いの言葉といたします。

博士学位授与式における 総長のことば

平成15年3月24日

総長 長尾 真

本日ここに博士の学位を得られた課程博士487名、論文博士140名の皆さん、まことにおめでとうございます。ご列席の副学長、各研究科長とともに皆さんの学位取得に対して心からお慶び致します。

さて今日の日本は皆さんもご承知の通り、経済は不振であり、産業もなかなか明るさを持つことができず、社会全体が低迷しており、いつになったら活力が取り戻せるかは誰にも分からないという状況にあります。そこで政府は構造改革を唱えたと共に、もう一方では科学技術によって日本の産業界に革新をもたらす必要があるとして、科学技術基本計画を実行しつつあります。科学技術の進歩が今日の文明と豊かな社会をもたらしたということは言うまでもありませんが、一方では、20世紀を振り返ってみますと、科学技術が人間社会と地球環境を脅かす種々の負の面を持っていたことも明らかとなりますのであります。

科学技術の持つこの負の側面を認識すべきことは当然ですが、人口の爆発的な増大、水や食糧・資源・エネルギーの不足、地球の温暖化といった深刻な問題に対処し、発展途上国を含み世界全体の持続的な発展を実現するためには、科学技術の力に頼らざるをえないことは言うまでもありません。しかし南北における富の格差や情報格差を克服し、人権を守り、生命倫理を尊重して、人類の明るい未来を切り開いてゆくためには、科学技術だけでなく人文社会科学がもっと重要視され、また人間の持つべき倫理、道徳への認識とその実践が行われてゆく必要があるでしょう。

世界の主要国が科学技術に力を入れ、国際競争力のある産業を興し、経済力を付けようとして、激しい競争をしている中で、我が国がどのようにすべきかは大きな問題であります。総合科学技術会議は国家的・社会的課題に対応した研究開発の重点課題として、ライフサイエンス、情報通信、環境、ナノテクノロジー・材料の4分野を指定していますが、これがその他の科学技術分野については力を入れないということになっては意味がありません。いろんな

分野で新しい発見やブレイクスルーがありうるわけですし、思いも寄らなかったことが産業に結びついてゆくことも十分に考えられるからであります。

日本のような先進国においては、米国やその他の国がある分野に力を入れているから日本もそうしなければ負けるといった近視眼的な発想でなく、科学技術全体を総合的に展望し、日本の社会にとって必要な科学技術に力を入れてゆくといった自信を持つべきでありましょう。たとえば社会と自然環境との調和といった観点や、資源がなく超過密な都市生活を余儀無くされている現状をいかにして打破できるかといった視点も大切であります。つまり進歩発展が比較的容易なところを政策的にのばすというよりは、こういう困難な問題は是非とも解決しなければ未来社会はないといったいわば困難な課題をこそ国として積極的に取り上げて解決してゆくという姿勢を持つことがこれから益々大切になってゆくのではないのでしょうか。

従来自然科学は方法論がしっかりしていますから、誰がやっても進歩発展してゆくものであります。よく言われることですが、ニュートンやアインシュタインといった天才が出てくることによって自然科学が飛躍的に進歩したことは事実ですが、こういった天才がいなかったとしても同じ結果は誰かによって何十年か後に得られていたに違いありません。自然科学はおおむねこのような形で発展してゆきます。

しかし人文科学や文学・芸術といった分野はそうではありません。源氏物語は紫式部がいなかったならばその後出現しなかったでしょうし、モーツァルトの音楽は他のいかなる人にも作れなかった天才の作品であります。人類の豊かな発展を考えるとすれば、科学技術だけでなく、こういったことの価値についても十分よく考えねばなりません。

今日我々が直面している地球環境問題や食糧・エネルギー問題などの21世紀の深刻な課題は、さらにもう一つ全く別の観点から考えねばならない、従来の自然科学の方法論の単純な適用では解決できない問題であると考えられます。これらの問題はいずれも人間の行動・社会活動等までを含んだ複雑なシステムの活動の結果もたらされてきたものでありますから、これをどのようにとらえ、総合的な立場からどのように解明してゆくかが問題であり、これまでの科学的方法論ではうまく取り扱えない問題である

ところに特徴があるといえるでしょう。

つまり、こういった問題に対しては、従来の自然科学の分析的、要素還元主義的な立場、あるいは文化芸術的な価値の観点からだけでは解決ができないわけで、個々人の社会生活における行動様式、価値観などが大きくかわるものであります。ひょっとすると人々の価値観が物質文明的な時代を通り過ぎて、精神文化や道徳を重んじ、善悪の判断に心を至すべき時代に入ってゆかねば根本的には解決しないのではないのでしょうか。また世界全体を直感的に把握する哲学的立場、禅的立場の方に有効な解決の糸口があるのかもしれませんが。

今日は、ほとんどあらゆる学問が技術・テクニッ

クに墮落してしまっております。学問は善悪などの価値と何ら関係のない世界で構築されますが、それが広い視野のもとでの善悪の判断をほとんど伴わずに、社会に応用されてしまっています。そしてそれがまた学問をますますテクニクの方向に曲げていくということになっているのであります。こういった中で、京都大学博士の称号を得て社会に出て活躍される皆さんは、自分の専門分野だけでなく、ここに述べた意味においても色々幅広く勉強し、よく判断をすることが必要であります。そして、しっかりと自分の価値観を確立し、社会のために貢献していただくことを念じ、私の挨拶と致します。

大学の動き

平成14年度卒業式

3月25日（火）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各部局長等の出席のもとに平成14年度卒業式が挙行された。京都大学交響楽団による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の奏楽、京都大学合唱団による学歌斉唱の後、長尾 真総長から、各学部代表に学位記が授与された。

続いて、総長の式辞があり、最後に「蛍の光」を全員が合唱して、午前10時50分に終了した。

本年度の新学士は、総合人間学部141人、文学部185人、教育学部67人、法学部410人、経済学部245人、理学部308人、医学部106人、薬学部90人、工学部904人、農学部290人の計2,746人であった。

平成14年度修士学位授与式

3月24日（月）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各研究科長等の出席のもとに平成14年度修士学位授与式が挙行された。

長尾 真総長から各研究科代表に、学位記が授与された後、総長の式辞があり、午前10時45分に終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科104人、教

育学研究科35人、法学研究科62人、経済学研究科89人、理学研究科240人、医学研究科16人、薬学研究科74人、工学研究科604人、農学研究科291人、人間・環境学研究科128人、エネルギー科学研究科122人、アジア・アフリカ地域研究研究科4人、情報学研究科174人、生命科学研究科77人の計2,038人であった。

博士学位授与式

3月24日（月）午後1時から，総合体育館において，長尾 真総長，両副学長をはじめ，各研究科長等関係者出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記が手渡された後，総長の式辞があり，午後3時終了した。

各研究科別の内訳は，次表のとおりである。

研究科	課程博士	論文博士	合計
文学研究科	16	9	25
教育学研究科	6	4	10
法学研究科	1	3	4
経済学研究科	15	7	22
理学研究科	121	14	135
医学研究科	85	25	110
薬学研究科	27	8	35
工学研究科	88	34	122
農学研究科	56	25	81
人間・環境学研究科	35	3	38
エネルギー科学研究科	16	4	20
アジア・アフリカ地域研究研究科	2	-	2
情報学研究科	19	4	23
計	487	140	627

医療技術短期大学の動き

平成14年度医療技術短期大学部卒業式・修了式

医療技術短期大学部では，3月17日（月）午前10時から，本短期大学部講堂において来賓の出席のもとに，卒業式・修了式を挙行した。

式は卒業証書・修了証書授与に引き続き，学長式辞，来賓祝辞があり，午前10時40分終了した。

卒業生は，看護学科85人，衛生技術学科42人，理学療法学科22人，作業療法学科15人で，修了生は，専攻科助産学特別専攻21人の計185人であった。

